

日本語における区別表現

—「別の／他の／異なる／違う」について—

言語学・応用言語学専攻

1LT08138T

百崎 晃平

2008 (平成 20) 年入学

2013 (平成 25) 年 1 月提出

要旨

英語の **different** という形容詞は、**big** や **beautiful** などのように、単に性質を表す形容詞とは異なる解釈上の特質があることが知られている。本論文では、英語の **different** に相当する日本語の表現「別の／他の／異なる／違う」について、それぞれの表現を比較した。その結果、それぞれが共通して持つ前提とそれぞれの性質が明らかになった。この4つの表現は、どれも、区別する対象 (またはグループ) が同一でないこと、区別する対象が隔絶し過ぎていないこと、という点では共通しているが、以下のような違いがある。

「別の」：外面的差異を重視し、前後の区別対象の間にある差異は近しいグループの範囲内の小さな差異であり、両者を明確に区別する意味合いが強い。

「他の」：外面的差異を重視し、前後の区別対象の間にある差異は近しいグループの範囲内の小さな差異であり、両者を区別するにとどまる。

「異なる」内面的差異を重視し、前後の区別対象の間にある差異はグループそのものの差異という大きな差異であり、事の正否の意を含まない。

「違う」：内面的差異を重視し、前後の区別対象の間にある差異はグループそのものの差異という大きな差異であり、事の正否の意を含む。

このように各表現が分類できることを示した。

1. はじめに	1
2. 「別の・他の」／「異なる・違う」	4
2.1. 用法的比較	4
2.2. 複数のグループにまたがる場合の解釈	6
2.3. 用法的比較のまとめ	9
2.4. 解釈的比較	9
2.5. 解釈的比較のまとめ	11
2.6. まとめ	11
3. 区別と比較 (他の)	12
3.1. 「他の」の特徴	12
3.2. まとめ	14
4. 「異なる」「違う」	16
4.1. 「異なる」、「違う」と事の正否	16
4.2. まとめ	17
5. まとめ	18
参考文献	19

1. はじめに

英語の different という形容詞は、big や beautiful などのように、単に性質を表す形容詞とは異なる解釈上の特徴があることが知られている。

- (1) a. I'll take the bigger than.
 b. This flower is more beautiful than that flower.
 c. My opinion is different from yours.

(1)において、形容詞 big や beautiful などは、「大きい」「美しい」対象の性質をあらわすことができるが、それ自体で二つの対象を区別することはできない。二つの対象を比べる際は、比較級の形をとらなければならない。ところが、different はその形容詞自体に「異なった、違う」という意味を含むため、比較級の形を取ることなしに二つの対象を区別することができる。

さて、英語の different に相当する可能性のある日本語の表現に「別の／他の／異なる／違う」等がある。これらの表現も、英語の different と同様、二つの対象との間にある差異を示すために使われる表現である。

- (2) a. シェイクスピアのマクベスとは別の本が欲しい。
 b. ?シェイクスピアのマクベスとは他の本が欲しい。
 c. シェイクスピアのマクベスとは異なる本が欲しい。
 d. シェイクスピアのマクベスとは違う本が欲しい。

英語の different や日本語の「別の／他の／異なる／違う」等は、その語彙的な特徴として、二者との関係を比べる意味を持つ。こうした表現を、本論では「区別表現」と呼ぶことにする。これら表現が、その意味として二者の比較の意味を持つということは、例えば(3)の例からもうかがえる。(3)は、区別する対象の一つしか言語表現として現れていないが、もう一方の対象があるように感じられる。

- (3) a. 別の本
 b. 他の本
 c. 異なる本
 d. 違う本

例えば「太郎の本、花子の本がそれぞれ一冊ある」状況で(3)を発した場合のことを考える

と、理解しやすい。

- (4) 状況：太郎の本、花子の本がそれぞれ一冊ある。
- (太郎の本とは) 別の本を取って。
 - (太郎の本とは) ?他の本を取って。
 - (太郎の本とは) 異なる本を取って。
 - (太郎の本とは) 違う本を取って。

「太郎の本」のような区別表現の前にある対象を「前の対象」と、「本(正確には花子の本)」のような区別表現の後にある対象を「後の対象」と呼ぶことにすると、(4)では前の対象「太郎の本」と後の対象「花子の本」という、同じ「本」という同じ属性を持つ物同士の違いを明らかにするために、区別表現が使われている。

しかし、前後の対象が取りうる範囲はある程度定まっており、どんな対象同士でも取りうるわけではない。そこには大前提として二つの条件が存在し、それは「二者が同一」と「隔絶し過ぎた二者」は前後の対象になることができないというものである。

- (5) a. *ハワイとは別のハワイに行く。
b. *ハワイとは他のハワイに行く。
c. *ハワイとは異なるハワイに行く。
d. *ハワイとは違うハワイに行く。

前後の対象は完全に同一のものを取ることができない。区別表現は前後の対象が同一ではないことを示すための表現であるため、当然のことである。

- (6) a. *この自転車とは別の本だ。
b. *この自転車とは他の本だ。
c. *この自転車とは異なる本だ。
d. *この自転車とは違う本だ。

また、前後の対象は、それぞれがあまりに隔絶しすぎるものであってはならない。(6)のように、前の対象「自転車」と後の対象「本」では、それぞれが属するグループが全く違う。そのような二者はわざわざ比べるまでもなく区別されるものであるため、意味の上では間違いのない内容なのだが、文章としては受け入れがたいものとなる。

このように、これらの区別表現は、同一ではないが、近い属性を持つ前後の対象の違いを明らかにしたい場合に用いられるが、ここでは「別の／他の／異なる／違う」という

四つの区別表現それぞれが持つ用法の差、意味解釈の差は見受けられない。

ところが、各表現によって、ある対象と区別されるものが指す内容や範囲がそれぞれ異なる場合が存在する。(7)のような例では、どのような「本」を欲しているのかが変化することになる。

- (7) a. シェイクスピアのマクベスとは別の本が欲しい。
b. ?シェイクスピアのマクベスとは他の本が欲しい。
c. シェイクスピアのマクベスとは異なる本が欲しい。
d. シェイクスピアのマクベスとは違う本が欲しい。

(7a)と(7b)は、シェイクスピアの作品群の中からマクベス以外の作品、例えばロミオとジュリエットのような本を、(7c)と(7d)は、シェイクスピアのマクベスと関わりのある「物語」の本を欲していることとなる。

本論文では、日本語で different に相当する可能性のある表現「別の／他の／異なる／違う」等を取り上げ、その用法を比較していく。まず次章では、四つの区別表現を二つのグループに分類する。「別の」、「他の」と「異なる」、「違う」で分けられたグループがそれぞれどのような差異を持っているのかを考察する。さらに、三章では、二章で分類した「別の」と「他の」の両者を、「他の」の性質に基づいて比較する。四章では、「異なる」と「違う」の両者を、「違う」が持つ要素に基づいて比較していく。最後に、それまでの分類をまとめ、四つの表現がそれぞれどのような性質を持つものなのかをまとめる。

2. 「別の・他の」／「異なる・違う」

2.1. 用法的比較

「別の／他の／異なる／違う」という区別表現は、大きく分けて二つのグループに分けられる。「別の・他の」のグループと「異なる・違う」のグループである。

- (8) 状況：太郎のカサと、それと同じ製品であるだれかのカサがカサ立てに残されている。だれかのカサを指さしながら¹。
- 太郎のカサとは別のカサだ。
 - 太郎のカサとは他のカサだ。
 - 太郎のカサとは異なるカサだ。
 - 太郎のカサとは違うカサだ。

いずれの例でも、後の対象「カサ」が指しているものは、「カサ立てに残されている同じ製品のカサ」である。

前の対象「太郎のカサ」と後の対象「カサ」がどちらも「同じ製品であるカサ」という小さなグループ内にあるものだととしても、そこには印象的な傷や名札タグといった持ち主ならば分かるような、微かな差異が存在し、それに基づいて前後の対象はたしかに区別されている。だが、それぞれの区別表現による差は見受けられない。

しかし、差異とは持ち主以外には分かりにくいような差異ばかりではない。一目瞭然、とでも言うべき差異も存在する。

- (9) 状況：ママチャリとロードバイクがあり、ママチャリを指さしながら。
- 別の自転車だ。
 - 他の自転車だ。
 - 異なる自転車だ。
 - 違う自転車だ。

「ママチャリ」と「ロードバイク」という大きな差異による区別の状況でも、それぞれの表現による差は見受けられない。

(8) と (9) の例文のように、区別表現の前後の対象には、(8) では「カサ」であり、(9) では「自転車」であるような、そのどちらもが含まれる大きなグループが存在する。これは、

¹ 以降の例は、区別表現の前後の対象が指すものをわかりやすくするため、状況を設定する。

あまりに隔絶したもの同士はわざわざ区別するまでもないからだ。そして、それぞれのグループ内に「折りたためない洋傘」や「和傘」、「ママチャリ」や「ロードバイク」といった小さなグループが存在することになる。そこで、(8) のような、小さなグループ内での個別のものによる差異を小さな差異、(9) のような、大きなグループ内でのグループの違いによるものを大きな差異とする。

その上で、前の対象と比べ、大きな差異をもつものと小さな差異をもつもの、二種類の後の対象を用意してみる。

- (10) 状況：太郎のカサ（折りたためない洋傘）と同種の洋傘、和傘が一つずつ、計三つのカサがカサ立てに残っている。
- 太郎のカサとは別のカサだ。
 - ?太郎のカサとは他のカサだ。
 - 太郎のカサとは異なるカサだ。
 - 太郎のカサとは違うカサだ。

(10)のすべての区別表現は前の区別対象「太郎のカサ」と後の区別対象「カサ」が同じものではないということを示している。しかし、(10a) と (10b) のグループと(10c) と (10d) のグループでは後の対象が指し示す「カサ」はどちらのカサであると優先的に解釈されるかが変わってくる。(10a) と (10b) のグループでは、「同種の洋傘」であり、(10c) と (10d) のグループでは「和傘」であると考えられる。

(10a) と (10b) において、前の対象「太郎のカサ」と後の対象「カサ」の関係性は、A と A´ というような近似的な関係性である。すなわち、前の対象「太郎のカサ (A)」とよく似た後の対象「同種の洋傘 (A´)」は、どちらも「洋傘」という小さなグループ内で所属している上で、それぞれが区別されている。つまり、(10a) と (10b) のグループにおいては、後の対象である「カサ」は、「太郎のカサ」と細かな点で完全に同一ではないものの、互いに一致する部分が多くよく似ている「同種の洋傘」とする、小さな差異の方が優先的に解釈される。

一方、(10c) と (10d) のグループでは、前の対象「太郎のカサ」と後の対象「カサ」の関係性は、A と B という関係性で表すことができる。「太郎のカサ (A)」も「和傘 (B)」はどちらも同じ「カサ (O)」という大きなグループに所属してはいるものの、さらに細かい分類によって、それぞれは明確に区別されている。つまり、(10c) と (10d) のグループにおいては、後の対象である「カサ」は、「太郎のカサ」と全体として見れば同じではあるものの、互いに一致する部分の少ない「和傘」だとする、大きな差異の方が優先的に解釈される。

- (11) 状況：一台のロードバイクと二台のママチャリがある。その中で、一台のママチャリを指さしながら。
- これとは別の自転車だ。
 - ?b. これとは他の自転車だ。
 - これとは異なる自転車だ。
 - これとは違う自転車だ。

前後の対象は同じ「自転車」という最も大きなグループ内に存在し、さらにその「自転車」という大きなグループ内に、「ママチャリ」や「ロードバイク」という小さなグループが存在する。

この状況でも、(11a) と (11b) においては、前の対象が存在する小さなグループ「ママチャリ」の範囲内での小さな差異を表すため、前の対象と近似な「もう一台のママチャリ」を指す。一方、(11c) と (11d) では「ママチャリ」とは大きな差異が存在する、「ロードバイク」を指し示す。

(10) と (11) のように、区別表現の後の対象が二つ存在する場合、「別の／他の」の二つでは、前の対象と後の対象を区別するのは小さな差異であり、両者は「A と A'」という近似的な関係性で表される。一方、「異なる／違う」の二つでは、前の対象と後の対象を区別するのは大きな差異であり、両者は「A と B」という関係性で表すことができる。

2.2. 複数のグループにまたがる場合の解釈

モノを分類してグループに整理する時、最大グループと最小グループの間には、いくつものグループが存在する。例えば、「本」を最大グループとする分類の中では、「物語」、「学術書」、「歴史書」などといった第二グループがあり、その「物語」という第二グループ内にも「古典」、「現代」、「マンガ」があり、そしてさらにそのグループ内にも……というようにいくつも細分化されていき、物語の最小グループである「シェイクスピアのマクベス」のような作品名にたどり着くまでに、様々な中グループが存在することになる。そして、それらの中グループには「古典作品をマンガ化した本」のように、複数のグループと重なり合っているグループが存在する。この、A かつ B のように複数のグループにまたがるグループが関わる場合の区別について考える。

ここでは「書店でシェイクスピアのマクベスを示しながら」という状況下である。この場合、書店の店員が薦めるのはどんな本なのだろうか。

- (12) 状況：書店でシェイクスピアのマクベスを示し。
- シェイクスピアのマクベスとは別の本が欲しい。

- ?シェイクスピアのマクベスとは他の本が欲しい。
- シェイクスピアのマクベスとは異なる本が欲しい。
- シェイクスピアのマクベスとは違う本が欲しい。

上の四つの区別表現は、(12) における前の対象である「シェイクスピアのマクベス」と区別された、各区別表現の後の対象である「本」がどんなものを指し示しているかによって二つのグループに分けられる。すなわち、「別の／他の」と「異なる／違う」の二つのグループである。とは、(12a) と (12b) では、シェイクスピアの作品群の中からマクベス以外の本を、(12c) と (12d) は、シェイクスピアのマクベスと関わりのある「物語」の本を欲していることとなる。

(12) における前の比較対象である「シェイクスピアのマクベス」と各区別表現の後の比較対象である「本」は、(12a) と (12b) では小さな差異による区別であるため、「シェイクスピアのマクベス」という作品が含まれるグループ（シェイクスピアの作品群）の中にある、マクベス以外の本、たとえば、「ロミオとジュリエット」などを指すと思われる。

一方、(12c)、(12d) における後の比較対象である「本」は大きな差異による区別であるため、「シェイクスピアのマクベス」という作品が含まれるグループ（シェイクスピア作品群）ではなく、その「シェイクスピアの作品群グループの範囲外の本」を指し示している。しかしながら、前の比較対象である「シェイクスピアのマクベス」とあまりにも隔絶し過ぎた物（本以外のグループ）ではわざわざ区別する必要がなく、また範囲が膨大すぎる物（「本」という最大グループ）では欲している物の特定が困難であるため、ここでの後の比較対象が指し示す「範囲外の本」は前の対象「シェイクスピアのマクベス」と正であれ負であれ、何らかの関係性を持つ本であろう。例えば、マクベスと同じ「悲劇」という要素を持つ他作者の悲劇「メディア」や、逆に相反する要素を持つ喜劇作品などだ。この例において、新書や学術書のような実用書を薦められることは考えにくい。そう考えると、後の対象である「範囲外の本」が取りうるのは「物語」というグループに属する本であると考えられる。

やはり「別の／他の」は前の比較対象が含まれるグループの範囲内での小さな差異を表し、「異なる／違う」は前の比較対象が含まれない範囲外で、グループの内と外の大きな差異を示しているのだろうか。

しかし、ここで前の対象を最小グループである「シェイクスピアのマクベス」ではなく、「シェイクスピア」や「マクベス」といった複数と重なり合う中グループにすることによって、区別表現の中で用法、意味解釈の変化がでてくる。

- (13) 状況：書店でシェイクスピアのマクベスを示し。
- シェイクスピアとは別の本が欲しい。

- b. ?シェイクスピアとは他の本が欲しい。
- c. シェイクスピアとは異なる本が欲しい。
- d. シェイクスピアとは違う本が欲しい。

(13c) と (13d) においては、前の対象が「シェイクスピアの作品群グループ」に変化してしまっても、(12c) や (12d) と同じく後の対象は「シェイクスピア以外の作者による本」と解釈され、その上でまったくの無関連な本ではないという判断から「物語」というグループに属する本を薦められるということだろう。また、「マクベス」が前の対象から外されたことで、「他作者のマクベス」を後の対象である「本」に含むことができるようになった。しかし、その優先性はあまり高くない。これは、「異なる／違う」が大きな差異による区別である以上、ある程度同じ規模のグループと重なり合う、近いグループは後の対象となりづらいからだ。

一方、この場合に、(13a) と (13b) における後の対象「本」は、(12a) と (12b) の後の対象「シェイクスピア作品群の本」ではなく、「シェイクスピア以外の作者によるマクベス」というものを指す。この後の対象の変化は、「シェイクスピアの作品群グループ」という「グループ全体」が前の区別対象となったことによって、区別表現が前後を区別するものである以上両者には差異が存在しなければならないという大前提に基づき、後の対象「本」は「シェイクスピアの作品群グループ」であってはならなくなったためである。

しかし、そうであるならば、後の対象「本」はいったいどのグループに所属するものを指し示すことになるのだろうか。それは、(12c) と (12d) のように後の対象は「物語グループの本」となるわけではなく、それよりも「他作者のマクベス」が優先的に解釈される。これは、後の対象が「シェイクスピアの作品群グループ」すべてを対象とすることが不可となった上で、それでも、より近似的な関係性、より重なり合う部分の多い「他作者のマクベス」グループが優先的に解釈されているからだろう。これは、「シェイクスピアの作品群グループ」と同程度の規模で重なりあっている、近いグループに「他作者のマクベス」が存在するからであろう。前後の対象の間にある差異が、なるべく小さな差異となるような解釈が優先されている。

- (14) 状況：書店でシェイクスピアのマクベスを示しながら。
- a. マクベスとは別の本が欲しい。
 - b. マクベスとは他の本が欲しい。
 - c. マクベスとは異なる本が欲しい。
 - d. マクベスとは違う本が欲しい。

この場合、(14)のすべての例文で「シェイクスピアの作品群」グループの中からマクベス

ではない本をすすめられることになると思われる。このような解釈の変化が生じたのは、「シェイクスピアのマクベス」から「マクベス」という最小の単体が前の比較対象になったことにより、「前の比較対象の範囲外となるグループ」がすなわち「シェイクスピアの作品以外の本」ではなく「シェイクスピアの作品群に属するマクベス以外の本」となったからではないだろうか。

そして、ここでも例文の (14c) と (14d) においても後の対象である「本」が、「物語グループに属する本」だという解釈がなされると思われるかもしれない。しかし、(12c) と (12d) において、後の対象を「物語」グループとする考えは、後の対象「本」が取りうる可能性がある範囲（シェイクスピアのマクベスと正負問わず関連する要素を持つ本）をすべて網羅しているグループが「物語」グループであっただけであり、その「物語」グループが内包する数々のグループ内からも、もちろん後の対象となりうる。さらに、(14) は(12)と違って、「マクベス」の持つ最大の要素である「シェイクスピアの作品」という要素が取りうる範囲に存在する。そのため、(14c) と (14d) では、後の対象である「本」は「シェイクスピアの作品群に属するマクベス以外の本」という解釈となる。

2.3. 用法的比較のまとめ

「別の／他の」は、前の対象と後の対象が同じ（それがなければ近い）グループの範囲内で、その中で小さな差異を表現したい場合に用いられ、「異なる／違う」は、前の対象と後の対象は違うグループに属しており、グループそのものの差という大きな差異を表現したい場合に用いられるのではないと思われる。

しかし、どちらの区別表現の場合も、基本的に前後の対象が完全に同一であってはならない。また、前後の対象があまりにも隔離し過ぎた物同士である場合はわざわざ区別するまでもないため、前後の対象には関連性が存在する。この二つが前提としてあると思われる。

2.4. 解釈的比較

では「別の／他の」と「異なる／違う」という区別表現の差異は前後の対象のグループだけなのだろうか。ここでは解釈の点から二つ区別表現のグループが持つ差異を比較していきたい。

- (15) 状況：男子の太郎と女子の花子がいる。
- a. 太郎は（花子とは）別の人だ。
 - b. 太郎は（花子とは）他の人だ。
 - c. 太郎は（花子とは）異なる人だ。

d. 太郎は (花子とは) 違う人だ。

(15) において、太郎と花子との間には、性別という明らかな差異が存在する。両者を区別している理由は一見するだけで分かる。しかし、だからといって両者を区別せしめているものが性別だけであるとは限らないはずである。両者の間には性別のような外面的な区別要因ではなく、性格・性質のような内面的な区別要因によって区別される場合もあるはずだろう。

(16) 状況：同じ場所に一卵性双生児の花子と良子がいる。

- a. 花子は (良子とは) 別の人だ。
- b. 花子は (良子とは) 他の人だ。
- c. 花子は (良子とは) 異なる人だ。
- d. 花子は (良子とは) 違う人だ。

外面的な区別要因を限りなく少なくした場合 (とはいえ、なくなったわけではない)、区別要因は内面的なものであるはずだ。しかしながら、(16a) と (16b) の「別の／他の」グループにおいて、花子と良子を区別している要因は髪形や服装といった極僅かな外面的な要因が強いものと解釈される。一方、(16c) と (16d) の「異なる／違う」グループにおいては、花子と良子を区別している要因は内面的なものが強いものと解釈される。おそらく、「別の／他の」と「異なる／違う」が行う区別は、その区別の要因となる差異の種類が違うのではないだろうか。

- (17) a. 源頼朝と徳川家康は別の時代に生きた。
b. 源頼朝と徳川家康は他の時代に生きた。
c. 源頼朝と徳川家康は異なる時代に生きた。
d. 源頼朝と徳川家康は違う時代に生きた。

どれも、源頼朝と徳川家康はそれぞれ鎌倉時代と江戸時代という別々の時代に生きていたということを示すことに間違いはない。しかし、表現として (17a) と (17b) では、源頼朝は鎌倉時代、徳川家康が江戸時代という具合にそれぞれ生きていた時代が違っているという事実を単純に述べているだけにすぎない。一方、(17c) と (17d) では、二人がただ単純に鎌倉時代と江戸時代という二つの時代でそれぞれ生きたというだけにはとどまらず、鎌倉時代と江戸時代の環境・風俗・文化といった時代背景を含めて、鎌倉時代と江戸時代というそれぞれの時代を生きていたという差異を表したような物言いにも解釈される。

2.5. 解釈的比較のまとめ

「別の／他の」は前後の区別対象の間で、表面的で簡単な事実を基準として、前の対象と後の対象を区別している。(16) において前後を区別している要因は花子と良子の間にある僅かな容姿や服装など、(17) においては、源頼朝による鎌倉幕府、徳川家康による江戸幕府といった簡単な事実などである。すなわち、前後の区別対象は、容姿のつくりや年代といった外面的かつ表面的な要因によって区別されている。

「異なる／違う」は前後の区別対象の間で、表面的で簡単な事実だけにとどまらず、両者が持つ性質や背景などといった性質のような内面的な要因も基準として、前の対象と後の対象を区別している。(16) において前後を区別している要因は、花子と良子の間にある性格や雰囲気などであり、(17) においては、鎌倉時代と江戸時代を比べたときにかがえる環境や文化、国際情勢などである。すなわち、前後の区別対象は、性質や時代背景といった、内面的かつ本質的な要因によって区別されている。

2.6. まとめ

まず区別表現には二つの前提が存在する。一つ目は、どちらの区別表現の場合も、基本的に前後の対象が完全に同一であってはならないということ。二つ目は、前後の対象があまりにも隔絶し過ぎた物同士である場合はわざわざ区別するまでもないため、前後の対象には関連性が存在するということである。

その上で、用法的に分類すると、「別の／他の」は、前の対象と後の対象が同じ (または近い) グループの範囲内で、その内での小さな差異を表現したい場合に用いられる。一方、「異なる／違う」は、前の対象と後の対象は違うグループに属しており、グループの差という大きな差異を表現したい場合に用いられるのではないと思われる。

また、解釈的に分類すると、「別の／他の」は前の対象と後の対象を容姿や服装、簡単な事実といった、単純かつ外面的な要因によって区別している。それに対して、「異なる／違う」は前の対象と後の対象を、性格や性質といった内面的かつ本質的な要因によって区別している。

3. 区別と比較

藤原与一ほか (1985) によると、「別」はそのものが他と違うと認められること。「そうでなければ話は別だ」のように、それを一緒に含めて扱えない事の意にも用いられる」とある。一方、「ほか (他・外)」は「ここではない、別のところ。また、これ (この人) ではない別のもの (人) の意や「思いのほか」「想像のほか」のように、そのなかにおさまっていないことの意にも用いられる」としている。

さらに、類語研究会 (1991) は「他」を「特定の事物・場所以外の事物・場所、特定の人以上の人・自分以外の人」の意とし、「別」を「事物や状態が同じでないこと、特別なこと、またはじめ・区別の意を表す」としている。

また、両者の使い分けについて藤原与一ら (1985) は、

- (18) a. 別の人
b. 他の人

- (19) a. 別のことも目を向けるべきだ。
b. 他のことも目を向けるべきだ。

(18a)、(19a) はそこにいる人以外やそこに認められる事柄以外の事を表すが、(18b)、(19b) はある特定の個人以外の人や他とは性質や内容が違うと認められる意を表す、と定義している。

では、「他の」がそれ以外の三つの区別表現と異なっている点は、それらだけなのだろうか。以下では、「他の」が持つ特徴について論じていく。

3.1. 「他の」の特徴

「他の」という区別表現は「別の／異なる／違う」といったものとは違い、前の比較表現を明示する際に用いられる「～とは」という言葉との容認性が低いように思われる。

- (20) 状況：シャチの写真を示しながら。
a. シャチは哺乳類とは別の動物だ。
b. ??シャチは哺乳類とは他の動物だ。
c. シャチは哺乳類とは異なる動物だ。
d. シャチは哺乳類とは違う動物だ。

- (21) 状況：太郎は花子ではなく、メアリーを飲み会に連れてきた。
a. 花子とは別の人が来た。
b. ??花子とは他の人が来た。
c. 花子とは異なる人が来た。
d. 花子とは違う人が来た。

ところが、「他の」の前に「～とは」という比較対象がない場合にはほとんど違和感はない。しかし、明示されていないからといって、その比較する対象が存在しないわけではなく、個々人の頭の中で適当に補完されているだけである。

- (22) a. 他の種類の動物だ。
b. 他の人 came.

では、前の比較対象が明文されている場合、「他の」だけに違和感が生じるのはなぜだろうか。ここで、(20b)、(21b) の文章を違和感のないように改変してみる。

- (23) a. シャチは哺乳類ではなく、他の種類の動物だ。
b. 花子ではなく、他の人が来た。

ここで注目したいのは(23a)、(23b)の「～ではなく」という部分である。「～とは」が容認しがたく、「～ではなく」が容認されやすいということは、「他の」という区別表現には「別の／異なる／違う」と比べて「他の」という区別表現はそれが持つ否定的な意味合いが弱いのではないだろうか。

「別の／異なる／違う」というそれぞれの表現は、前の比較対象と後の対象との明確な差異を明らかにする意味合いが強く感じられる。前者と後者をはっきりと、強く区別するそれらはある種の否定的な印象を読み手側に与えるものではないだろうか。

一方、「他の」という表現は前後の比較対象で差異が存在するという事実だけを強く言いたいのではなく、それよりも前の対象と差異のある後の対象を補足する意味合いが強いのかも知れない。そのため、「別の／異なる／違う」といった区別表現に比べ、「～とは」という比較だけでは不足に「～ではなく」という否定的な表現を加えなければ容認しがたいものになってしまうのではないだろうか。

そこで、「～ではなく」という否定表現を使わなくとも、うまく改変できる例を考えてみたい。また、同じ改変を「別の／異なる／違う」にも当てはめてみる。

(24) 状況：以前失敗したパズルに再挑戦する。

- a. 前回とは別の手段を試す。
- b. ??前回とは他の手段を試す。
- c. 前回とは異なる手段を試す。
- d. 前回とは違う手段を試す。

(25) 状況：以前失敗したパズルに再挑戦する。

- a. 前回の失敗を踏まえ、(前回とは) 別の手段を試す。
- b. 前回の失敗を踏まえ、他の手段を試す。
- c. 前回の失敗を踏まえ、(前回とは) 異なる手段を試す。
- d. 前回の失敗を踏まえ、(前回とは) 違う手段を試す。

(25b) では、(24b) の例文を「～ではなく」という否定表現を使わなくとも、違和感のない文章に改変することができた。また、それぞれの区別表現にも当てはまるように見られるが、それぞれの区別表現の前には「～とは」という暗黙の比較表現が隠れているとみて間違いない。

ここで感じられたことは、区別表現前後の対象のどちらに重点を置くかということである。「別の／異なる／違う」といった表現では、前の比較対象である「前回の手段」と後の対象である「今回の手段」のどちらもが等しい位にある。あくまでも「今回」と「前回」が別物であることを言いたいのであって、どちらか一方に重きを置いているというわけではない。両者の間に存在する差異そのものに焦点を当てているのであって、前後の違いそのものにはあまり頓着していない。

一方、「他の」という表現では、前の比較対象である「前回の手段」と後の対象である「今回の手段」のうち、どちらに重点を置いているかと言うと「今回の手段」の方である。「前回の手段」と「今回の手段」には差異があると軽く示すことで、後々述べられるであろう「今回の手段」の補足をしているのではないだろうか。

「他の」も「別の／異なる／違う」といった表現同様、前回と今回の間に差異が存在していることを示している点では同じだが、その重きを置く場所が違うのかもしれない。これは「他の」が「～ではなく」という意味合いが薄いことと反発しない。「他の」が持つ役割は両者間の差異そのものについてではなく、後の対象と前の対象をただ区別することで、後の対象が前の対象とは違う物であることを補足する役割が主なのではないだろうか。

3.2. まとめ

「別の／異なる／違う」の各表現は、前後の区別対象を明確に区別するため、ある種否

定的な意味合いを含むが、「他の」という表現にはそれがない。「他の」は後の対象について語る上で、前の対象とは差異があるという事実を補足しているだけにすぎず、前後の両者を区別する役割はその副次的な役割にすぎないものではないかと考えられる。

4. 「異なる」「違う」

「異なる」と「違う」を使い分ける場合、異なるはもっぱら文語調で硬い言い方として使われることが多いが、違うは文語調だけでなく口語調でも使われる。藤波 (1994) でも、両者の使い分けの一つとして、「違う」が日常一般的に用いられ、「異なる」は文章語的で硬い言い方としている。

- (26) a. 太郎の家とは異なる家だ。
b. 太郎の家とは違う家だ。

- (27) a. 「あんたとは異なるってば」
b. 「あんたとは違うってば」

(26) のような文語調ではほとんど変換可能な表現同士ではあるが、(27) のような口語調において、どちらも不正解ではなく意味としては通じるが、どちらかといえば (27b) の方が受け入れやすいものである。

4.1. 「異なる」、「違う」と事の正否

「異なる／違う」の差異は、その区別するものの種類による、という論はまだまだ曖昧な分類の仕方であると言わざるを得ない。そこで、「異なる」と「違う」の単語そのものが持つ意味に着目してみる。

- (28) 状況：先に花子が 24 と解答した。
a. 太郎の解答が (花子の解答 24 とは) 異なる。
b. 太郎の解答が (花子の解答 24 とは) 違う。

(28a) も (28b) も、太郎の解答と花子の解答とが一致しなかったと解釈できる。この場合、「太郎の解答」と「花子の解答 24」が一致しないと言っているにすぎず、「太郎の解答」が「問題の正答」であるかどうかは考慮されない。両者を区別・比較する意識に重点がおかれている。

- (29) 状況：黒板の数学の証明問題に答える。
a. 太郎の解答が (模範解答とは) 異なる。

- b. 太郎の解答が (模範解答とは) 違う。

しかし、(29a) では、「太郎の解答」が「模範解答」と一致しないと言っているにすぎない。そのため、「途中式が模範解答とは異なっていたが、最終的な答えは同じ」という解釈もありうる。一方、(29b) では、「太郎の解答」と「模範解答」が一致しないと言っているだけではなく、「太郎の解答」が完全に間違っているという解釈も取りうることとなる。

また、(29a) はあくまで前後の比較において「太郎の解答」と「模範解答」が「正解」と一致しないということは言えても、それは即不正解だと解釈されるのではなく、あくまで「一致しない」ということを言いたいのである。(29b) のように問題の正解不正解はあまり考慮されないと考えられる。

- (30) 状況：駐輪場で、自分の場所に、自分のものではない自転車がかった。
a. この自転車は自分の物とは異なる自転車だ。
b. この自転車は自分の物とは違う自転車だ。

(30a)、(30b) 双方とも、「自分の自転車」と「この自転車」の間に明確な差異 (たとえば色、材質、折りたたみか否か) があることを示し、区別していると解釈できる。しかし、(30b) の場合のみ、「この自転車」が「自分の自転車」ではないというだけでは、間違っている、正しくない、というニュアンスを持つことができる。

4.2. まとめ

「異なる」は対象を区別・比較するだけにとどまり、正しくない、間違っているといった事の正否は問わない。「違う」は対象を区別・比較するだけでなく、正しくない、間違っているという事の正否にまで解釈が及ぶ。

5. まとめ

それぞれのセクションで定義した各区別表現の用法をまとめたい。大前提として、区別する対象（またはグループ）は同一でないこと、区別する対象は隔絶し過ぎていないこと、という条件が存在する。

- (31) 「別の」：外面的差異を重視し、前後の区別対象の間にある差異は近いグループの範囲内の小さな差異であり、両者を明確に区別する意味合いが強い。
- (32) 「他の」：外面的差異を重視し、前後の区別対象の間にある差異は近いグループの範囲内の小さな差異であり、両者を区別することとどまる。
- (33) 「異なる」：内面的差異を重視し、前後の区別対象の間にある差異はグループそのものの差異という大きな差異であり、事の正否の意を含まない。
- (34) 「違う」：内面的差異を重視し、前後の区別対象の間にある差異はグループそのものの差異という大きな差異であり、事の正否の意を含む。

前提条件と合わせ、「別の／他の／異なる／違う」という四つの区別表現が持つ性質の差異を上記のように分類した。

参考文献

- 藤原与一、磯貝英夫、室山敏昭（編）（1985）『表現類語辞典』東京堂出版
藤波誠治（1994）『使い方の分かる類語例解辞典』東京：小学館。
藤波誠治（2003）『使い方の分かる類語例解辞典 新装版』東京：小学館。
類語研究会（編）（1991）『正しい言葉づかいのための似た言葉使い分け辞典』創拓社出版